温故知新

（題字は耿墨学）

◇ 200号記念特別版 ◇

2017.2.10 発行

一般社団法人

日中文化協会

はじめに

　今年の二〇一七年一月号がニューズレターの二〇〇号でした。その間、前理事長で私の母であります、上山綾子が亡くなった翌月、二〇一五年一月を除くすべての月でニューズレターを発行することができました。一口に二〇〇号と申しましても、十六年九か月もの期間発行し続けた成果であり、編集に携わっていただいている会員の方々やそれを読んでくださる会員の方々無くして、達成できるものではありません。本当にありがとうございました。一時期、コンテンツもマンネリ化をして面白くないというご指摘もいただきましたが、今年度より新たに編集委員会を組織しその質も向上できているのではないかと思います。

　さて、二〇〇号記念号に際して、寄稿文を多数いただき、ありがとうございました。読みながら改めて父、母のことを思い出しております。今私がこうしていられるのも、父、母がいたからであり、更には祖父、祖母がいたからであることは動かしようのない事実ではあますが、当初は文化協会、会社、財団と、個人的には「偉いもん引き受けなきゃいかんなあ」と気が遠くなるような状態でした。また、皆様方には「こいつで大丈夫か？」というご不安を抱かせてしまうことになりました。ただ、このようなチャンスに恵まれる人間もそれほどいないのではないかと思うに至り、不足しているところは補うとして、感謝とチャレンジをしていければと現在は考えております。

　日中関係どころか、トランプ大統領になって、世の中がどうなってしまうのかわからない時代が迫ってきておりますが、今年は日中国交正常化四十五周年であり、私も四十五歳になります。より一層日中の関係発展に向けて頑張っていきたいと考えておりますので、どうぞ、今後とも日中文化協会をよろしくお願い致します。

一般社団法人日中文化協会
理事長　上山　伸治

目次

今こそ真の日中交流を …… 川村　範行 (2)
回文つくりから重慶を思い起こす …… 杉原　直 (2)
心と心を結ぶ交流を今こそ …… 唐　啓山 (3)
こんなに早くから会員だったの？ …… 熊谷　光 (3)
「縁」 …… 金　大一 (4)
これまでの日中文化協会の活動を振り返って …… 甲斐　敏行 (4)
理事長　上山綾子さんとの思い出 …… 北島　芳翔 (5)
「君子動口、小人動手」 …… 内田　稔 (5)
留学生弁論大会に思う …… 杉本　克治 (6)
理事長の思い出 …… 石川　知子 (6)
◆　日中文化協会活動紹介　◆ …… (7)・(8)
〃一帯一路〃海外華人への影響 …… 任　健 (9)
熱都の会員の独り言（寒中に） …… 新井　正三 (9)
上山卓司初代理事長の思い出 …… 山本　哲夫 (10)
日中文化協会と私 …… 服部　牧子 (10)
日中文化協会郡上市支部発足と現況
（前理事長故上山綾子さんを偲んで） …… 河合　恒 (11)
日中文化協会ニュース二〇〇号発行おめでとうございます …… 加藤　信恵 (12)
私と中国 …… 藤吉　行雄 (12)
習い覚えた小さな技で …… 上山　みさ子 (13)

今こそ真の日中文化交流を

川村範行
（名古屋外国語大学特任教授、東海日中関係学会会長、日中文化協会理事、中日新聞社元論説委員）

地道に日中両国間の文化交流を続けてきた日中文化協会の足跡は尊い。東京の日中文化交流協会は国交正常化以前からの歴史があるが、名古屋で産声を上げた当協会が十五年以上も活動してきたことに意義がある。

私が一九九八年に中日新聞社上海支局長の任を終え帰国して間もなく、故上山卓司初代理事長からご相談を受けたのがご縁の始まりである。純粋に文化交流を通じて日中両国の相互理解を促進したいというお考えに共鳴した。協会の命名の際に私の意見を聞き入れて下さった、故卓司さんの穏やかなご表情を昨日のことのように思い起こす。笑みを湛えて協会を指導した故綾子前理事長のお姿も忘れられない。

三代目の伸治理事長のもと、活動が軌道に乗ってきたのは喜ばしい。伸治さんには良きご親族、お仲間と心をひとつにして、若い発想と力を発揮し、新たな日中文化交流を切り拓いていってほしい。

私が会長を務める東海日中関係学会は中統会館を公開研究会会場にお借りし、協会員も聴講無料にして相互乗り入れを図っている。丹羽宇一郎元駐中国大使の講演会を学会、協会などの在名団体共催で開催し、成功に導いた。今後もますます連携を図り、日中関係の改善に寄与できればと考えている。

日中両国は現在、領有権と歴史認識、さらに南シナ海の問題を抱えている。国交正常化以来の経済協力を基にした日中友好時代は遠のき、安全保障面で対立する危惧もある。日中関係は「何かあれば坂道を後退してしまう」（二〇一六年九月の日中首脳会談で習近平国家主席）という正念場にある。私は学会や講演で①首脳相互訪問の早期実現②東シナ海共同管理機構（仮称）の設立③尖閣歴史共同研究の開始④日中戦後和解の取り組み⑤青少年交流・記者交流の拡大―の五点を提唱している。

根本的には世論を動かす両国民感情の改善にかかっている。十二月に上海からの機内で隣り合った中国人女性に話しかけると、「戦争で日本は嫌だったが、日本観光から帰った友人たちが『日本人は礼儀正しく、街がきれいで、日本製品は良い』と熱心に勧められたので初めて日本へ行く」と答えた。相手の良さを知り、誤解や偏見をなくし、理解し合うことがいかに大切か。今こそ、真の日中文化交流が求められているのである。

回文つくりから重慶を思い起こす

杉原直

「上海自来水来自海上」〔上海の水道水は海からとられている〕

これは、中国語の回文である。日本の言葉遊び「竹やぶやけた」、逆さに読んでも「山本山」の回文である。平成二十九年の干支は酉、ニワトリ。ニワトリとワニを組み合わせ、「謹賀か、鶏と鰐が歓喜」と作って、回文年賀状を書き終えた。

二〇〇二年九月、日本語教師として重慶医科大に赴任した際、このニューズレターに「杉原直の重慶日記」として連載させて頂いた。「重慶日記」には書かなかったが、重慶市街の古刹の庭亭の柱に簡単な回文が双連で彫られていたのを思い出した。その回文は今忘れたが、その時作った私の回文をここに載せる。

「雄々と古び建つ、谷間に建ったビル府、十お」〔おおとふるびたつたにまにたつたびるふとおお〕

これは重慶の街の風景を表現した回文であるが、友達に披露するもあまりよく理解してもらえなかった。

重慶は別名「山城」と呼ばれている。巨大な山中の街である。百貨店の正面玄関が五階で、一階からも公道へ出られる。そんなビル群が四方の山や谷から筍のように生えている風景。会報二〇〇号の記念に、甘い回文で出来た中国のお菓子、プレゼン糖をお土産にどうぞ！

「これは養豚セレブのプレゼン糖よ晴子」〔これはようとんせれぶのぷれぜんとうよはれこ〕

心と心結ぶ交流を今こそ

唐啓山（専務理事）

皆様のお蔭で日中文化協会のニューズレター「温故知新」は、二〇〇号に達しました。凄いことですね！数えてみると文化協会も今年十八年目になります。時間の速いこと！そして今年は日中国交正常化四十五周年、来年は日中平和友好条約締結四十周年。両国友好の新時代の扉を開くチャンスの年を迎えます。

近年以来、日中関係はかつてないほど冷え込み、さらに中国が経済的に強くなったことも重なって、日本社会には中国に関するマイナス情報が増えています。本屋には中国を批判する本がたくさん並んでいます。それらは売れているようですが、「売れる本」イコール「良い本」とは限りません。日中友好にプラスになる情報や本などをもっと出してほしいです。一番大切なことは、両国民が尊重し合い、友好のためにプラスになる情報を積極的に発信することだと私は思います。メディアや出版物だけでなく、日中文化協会のニューズレター「温故知新」のような情報も大変大事だと思います。素晴らしいことに、これが二〇〇号も出ました。最初から編集、作成、印刷に努力した上山卓司、上山綾子前理事長、現在頑張って頂いている上山伸治理事長、上山耕治編集委員長に感謝の気持ちを申し上げたいのです！毎月毎月大変な事で、本当にご苦労様です。

日中友好には、政府間交流と民間交流は車の両輪のようなものです。両者が共に前進しなければ、友好は前進しません。日中文化協会が行っている中国の書道展、青少年の交流、中国旅行、日本語弁論大会などの民間交流はすごく大事な事だと思います。

今うれしいことは、たくさんの中国人が日本を訪れていること。彼らは日本に対して良いイメージ、日本人の温かい気持ちを持って帰って家族や友人に伝えて、対日感情が少しずつ良い方に変わっていくでしょう。一方で日本の方々は中国をあまり訪問していません。もっともっと行って欲しいな〜と思います。

私は今、日本に来て良かったと心から思っています。今後自分が出来る限りの事で、日中友好に貢献したい。一人の力は小さいかもしれませんが、文化協会の皆様の力を合わせれば、日中友好は必ずできます。心と心を結ぶ交流を今こそ！

こんなに早くから会員だったの？

熊谷光

会誌「ニューズレター二〇〇号」おめでとうございます。私が、「日中文化協会」の会員になったのは「いつからかなァ」と、昔のファイルを引っ張り出して見てみたら、二〇〇〇年一〇月一日号（VOL・６）が一番古く、会員になってからもう十五年も超えているんだと…

会員になったきっかけは、同じ中国語教室に通っている仲間から、「日中文化協会」という中国語を勉強するのに、絶対にプラスになる会があるからと誘われたのが始まりです。

あれから十五年余。「ニューズレター」の綴りを繰っていくと、「仲間紹介」という欄では、懐かしい顔写真と名前、「この人は、この子（留学生）は、いま、どうしているのかな？」と想いにふけってしまいます。なかでも、私に中国語を教えてくれた留学生。「ともだちのともだちはともだち」形式で、大学を卒業して帰国するときには、必ず代わりの留学生を紹介してくれた留学生たち…中国で、元気に活躍している姿を頭に思い浮かべながら、「がんばれヨーと！」エールを送りながら、その当時を思い起こしています。

また、協会主催の短期研修旅行で、北京オリンピックの前年、郡上の仲間たちと北京の「中関村」で「郡上踊り」を練り歩いたのも記憶の一つとして残っています。会員期間が長いと、多くの人、多くの留学生と触れ合うことができ、前述した中国語教室の仲間が言った通り、中国語だけでなく、人とのつながりにもプラスになったと思います。

今後の「日中文化協会」の更なる飛躍を願うとともに、留学生を軸とした会の運営もあってもいいのではないかなと思い、ペンを置きます。

「縁」

金大一（理事）

記憶のページをめくり、その中で様々な思い出の記憶を、次々と思い出した。それは私にとって人生を奮闘していた中での鮮やかな記憶でもある。

人生の成り行きで日本へ留学、そのまま日本で二十二年間勉強、就職、起業…まさかこの土地でまた一つの人生を送るとは思わなかった。この全てが「縁」だと思った。仏教の中に「因縁」と言う仏語がある。この言葉の様に私の人生の全ては「因」から始まり、「縁」で結び付いてきた。

二〇〇〇年の夏、友人唐先生のご紹介で設立してまもない「日中文化協会」に入った。日本へ来て、初めてこれほど沢山の親切な日中友好の有識者に出会い、そこで上山卓司先生と上山綾子さんに出会った。これが私の「因」だった。二人には時に厳しい説教をされ、時には家族のように愛され、これが私の「縁」になった。

今思い出したら、十年前のことでした。自分が会社経営で綾子さんにご迷惑を掛け、大変苦しんでいた時、綾子さんは「金ちゃんを信じています。あなたが立ち直って見せてくれることこそが一番の証明です」と言ってくれた。この言葉が今の人生を変え、また新しい人生を歩んでいる。

医者から経営者、経営者から講師…波乱万丈の人生の中で、これからもこの「縁」を大事にしていく。

これまでの日中文化協会の活動を振り返って

甲斐敏行

日中文化協会の会員になり、これまで色々な企画に参加させて頂きました。そして日中が友好関係を継続し、信頼を築くことが大事だと確信しました。一衣帯水と言われる隣国である中国と仲良くしなければならないとの強い想いがあります。友好交流と相互理解を目的に微力ながらこれからも貢献していきたいと思っています。

ここで二〇〇六年一月一六〜二三日で旅行したオーストラリア「自由自在アデレード生活体験」を紹介させて頂きます。アデレードは以前上山卓司・綾子さんご夫婦がご家族で一九九〇年から一九九五年までの約五年間暮らしていた所です。人々は親日的で第二の故郷との思いが募ったそうです。我々もそのすばらしい自然環境に恵まれたアデレードを満喫・堪能させていただきました。上山さんが第二の古里と言われたように友人のBerylさん宅では家族でWelcome・Partyをして頂き大歓迎を受け、海を望む景観の良い所でバーベキューをご馳走になりました。今思いますに上山さん一家が暮らしたアデレードでの生活が今日の日中文化協会の礎・源流になっているように思われます！

小生も現在例会の司会進行をさせて頂いてますが、皆様方との一期一会の出会いを大切にして利他的に日中友好を進め両国の発展に寄与出来るようにボランティア・スピリットを発揮していきたいと思います。

終わりに上山卓司・綾子さんご夫婦の日中文化交流における〝軌跡と友誼〟を讃えたいと思います。見返りは期待せずに、日中の幸せをひたすら希うご夫婦でした。これから新しい理事長・上山伸治さんを中心に日中友好を慈愛を持って「和顔施」で貢献していきましょう。ありがとうございました。

理事長　上山綾子さんとの思い出

いけばな小原流　北島芳翔

私は九階で、いけ花のおけいこをさせていただいています。

平成二六年一二月二八日、その日は、年の最後のおけいこ日でした。三日前、綾子さんから留学生の方がホームステイの家にお正月花をプレゼントしたいとの事でした。お昼過ぎに二人で部屋に来られ、綾子さんに通訳していただき無事に終わりました。お正月らしい花に、二人共気に入っていただいたように思いました。綾子さんと私は、お互いに「来年も又よろしくお願い致します」と挨拶を交わしました。それが、最後のご挨拶となりました。

初めて、綾子さんとお会いした時「何と肩の力を抜いた方だろう」と思ったのが第一印象でした。物静かで、まるでモナリザのような微笑みで暖かい風貌に滅多に見掛けない女性に思えました。〝文化交流in南寧〟の旅では、中国側の要人にお会いになられる時は、日本側の代表者として、物静かに凛として本領を発揮されました。奥の深い、素晴らしい方だと思いました。

私の息子は、十六才で横浜港から鑑真号で、アテネまで、シルクロードの旅へと一人旅に出掛けました。インターネットのない時代に十年間、日本、中国、インド、チベット等を行き来し、その後、雲南師範大学へ留学しました。中統ビルに、初めて伺って、我が息子のような若者がたくさん出入りしている事に驚きました。我が子も、世界の何処かで、このように他国の人達にお世話になり成長してきたであろうと、過去を振り返り、綾子さんと、語らいました。何か少しでも、お役に立てる事はないかと常々思っていました。

春節の時、いけ花を体験していただき、玄関先に飾った事、高校生の来日の時、体験のお手伝い出来たのも、綾子さんの一言でした。私のおけいこにも、綾子さんの大学の後輩の方や、中統のお世話で息子さんが中国に留学されたお母さんが来てくれています。何かご縁がたくさんあり、驚いています。

日本のお母さんと慕われた綾子さんの「お別れ会」の時の、若い留学生の人々の涙を忘れる事が出来ません。若者のエネルギーが、今後の中統の力になって発展する事でしょう。ご尊父様の信念を受け継がれ、綾子さんの蒔かれた種が大きな花を咲かせ、実を結びつつある中、ご子息様達が引き継がれ、大きく羽ばたく事を願っています。

もっともっと多くの事を綾子さんと語り合えなかった事が残念でなりません。

「君子動口、小人動手」

内田稔

時代劇をテレビや映画で見てますと、劇中で「将軍の指南役」とか「一手ご指南を」なんてセリフが出ることがあります。またM書店の店頭では、ハウツーものコーナーを「指南書フェア」と銘打っていました。

この「指南」という言葉は、実は古代中国で、霧の中での戦いで、常に南を指す車（指南車）を使って、敵に勝ったという故事から来ているようです。このことをもって、中国では「羅針盤」を、中国古代の四大発明の一つとしています。なお、あとの三つの発明は、紙、火薬、印刷術です。この四大発明は、張芸謀監督が演出した二〇〇八年の北京オリンピックの開会式でも、明らかにそれを意識した物が登場しましたので、気が付いた方も多いと思います。

さて我が国では、これらの発明に加えて、漢字や十進法なども中国から借用し、さらに論語から李白、杜甫、白楽天なども教養として学習しているのですから、その恩恵たるや莫大なものでしょう。そんな中国との関係も、近代は日清戦争や、不幸な日中戦争などを経て現在に到っています。それが特に最近の尖閣諸島の問題や、中国の海洋進出等もあって、日中共にあまり友好的とは言えない情勢なのは、大変に残念なことです。

さて、ここからは単なる中国学習者の一人として、今の中国との関係で、日中、特に中国の偉い人達に送りたい諺があります。それは「君子動口、小人動手」です。この意味は、中日大辞典（大修館）では、「君子は口を動かし（道理で争い）、教養のない人は手を動かす（腕力を用いて争う）。」中日辞典（小学館）では、「君子は言葉で、小人は腕力で物事を解決しようとする。」とあります。如何ですか。

こんな言葉は、今の政治家にとっては、紙くず同様なのでしょうか。

留学生弁論大会に思う

杉本克治

昭和二五年、小学校六年生の二学期、一一月ころではなかっただろうか。当時私は岐阜県の瑞浪にある小学校に在学していた。担任の先生から、交通安全啓発の弁論大会があるので、出てみないかというお誘いの言葉をいただいた。あのころは、車も少なく、交通事故を見聞きすることは滅多になかったが、たまたま自転車とトラックの接触事故を見たことがあったので、それを題材にした。

生まれて初めて、壇上に上がり、多くの聴衆の前で話をした。生来のあがり症で、心臓が波打ち、足が震え、大変な思いをしたが、何とか最後まで続けることができた。

この体験は、もう六十年も前のできごとだが、二年前の留学生弁論大会で大変役立った。たまたま二名の大会に参加する中国人留学生のお世話をすることになった。言語、文化、習慣等の違う国からやって来た彼女たちは、流暢な日本語を話し、話の論点も実にしっかりしていた。日本にきて、中国の良さを再認識したり、日本へ留学した意義についてしっかりした考えを持っていることに感心した。日本語のアクセントも正確で、日本人を超えている部分もあって、努力の跡が見て取れた。聴衆の前で話すにあたっては、相手が理解できるようにゆっくり話すこと、原稿はなるべく見ないで、暗記することなどを伝えた。

能力の高い中国の若者同様に、日本の将来を託す日本の若者も真面目に、真摯に学問に取り組んでいる。こうした若者たちが、協力して国際社会で活躍することを期待している。

理事長の思い出

石川知子

日中文化協会に参加させていただいて十五年になります。梅原会長の「長江文明について」の講演を　中電ホールでの日中文化協会創立一周年記念大会でお聞きしたことが記憶にあります。

創立時の理事長、思い出の中の卓司氏はいつも笑顔です。毎月の例会の会場で会員の皆の活動の様子を片隅でいつもにこにこと見ておられました。穏やかな紳士のほほえみでした。しかし時にはいたずらっ子のような目をなさるときもありました。

中国領事館が名古屋に開設されるというニュースが新聞に出たとき、それは大ニュースだけど他人事でした。それからしばらくしての運営委員会で理事長が「今日はお話があります」と発表されたのが「この中統ビルの四階に中国領事館が来ます」です。運営委員一同「えぇーっ！？」とおどろきの声をあげました。そんなみんなの顔を見回しながらの理事長のいたずらっ子のような眼も忘れられません。

理事長は「志をもって日本にやってきた留学生たちが日本に来てがっかりしていないだろうか。日本を好きになって帰ってもらいたい」と常々言っておられました。来日した中国の子供たちのホームステイを引き受けるということが、少しでも理事長のお志に沿うこととして　私どもにできることかなと思ってきました。

卓司理事長が倒れられるという思いがけないことになり、綾子さまはどんなに苦渋の日々を耐えられたことでしょう。そしてそれまで携わってこられた多種の役割に重ねてさらに　御夫君の後を引き継がれ、協会の仕事の重責を担い大変なご苦労をなさったと思います。それにもかかわらず　思い出の中の綾子理事長のお顔もいつも笑顔です。

私は疑問に思ったことは即座に問いただす癖で、綾子理事長に協会の在り方などで　不遜にも不満を投げつけることが多かったのですが必ず丁寧に応えてくださいました。そのつど　信頼感が深まりました。パソコンに残る綾子メールは私の宝です。

中国旅行では何度かご一緒しました。そのつど　さまざまなハプニングに見舞われました。「どうしようどうしよう！」と慌てふためく場面でも　綾子理事長は超然としたもの。機知と度胸で難なく潜り抜けるのでした。

「女傑」という言葉はちょっと違和感もありますが、尊敬できる素晴らしい女性でした。

お二人の理事長のお志を引き継いでいきたいとねがっています。

「留学生の主張」日本語弁論大会

〟祖国を離れ、家族と離れ、文化の違う日本という国で生活している皆さんの声を聞かせてください。

日本の生活の中で体験した事、感じた事を発表してみませんか？〟

このようなテーマの下、毎年五月、日中文化協会の大きな柱の一つとして、留学生による日本語弁論大会を開催しています。

留学生たちの主張は本当に多彩で、日本での生活の中で便利なこと、不便なこと、嬉しかったこと、悲しかったこと、日本人の不思議な習慣、文化や言葉の違いによる思わぬ失敗談、自身の故国での日本人のイメージ、日本のテレビ番組の感想など、日常生活のあらゆる場面において、日本人とは違った感覚で、彼らが様々なことを感じたり、考えたりしている現実に驚くかもしれません。

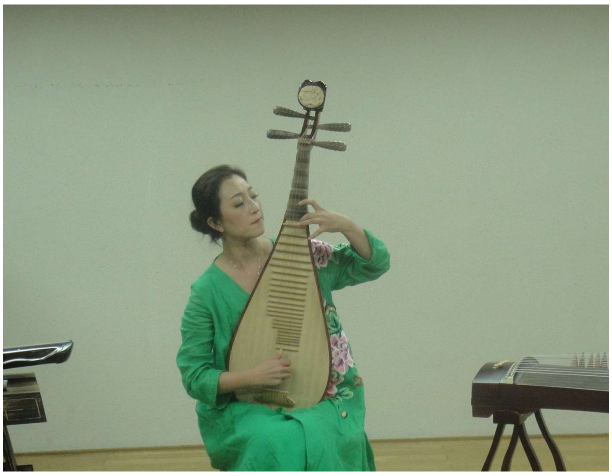
日中文化協会の法人化をきっかけにJCCA留学生会によって企画・実施され、今年で第八回目の開催となります。二〇一七年二月一〇日現在、発表者を募集中です。東海三県の留学生であれば、国籍や学校を問わず参加できます。優秀者には愛知県知事賞や名古屋市長賞に加え、賞金も授与されます。

月例会

毎月第一火曜日の夜に、中統ビルの四階で月例会を開催しています。留学生と中国語の会話を練習する一部、識者や芸術家を講師に招いて講演を行う二部、お茶やお菓子と一緒に親睦を深める三部、という内容で構成されています。

その他にも、夏には納涼親睦会、年末には忘望年会、年初には春節祝賀会、といった宴会も開催します。

中国のニュースや様々な文化に触れて理解を促進する機会として、日中文化協会の設立以来、ずっと続けられている事業です。



ニューズレター

毎月一回、ニューズレターを発行しています。WEBサイトでも閲覧可能です。月に二回ほど編集委員会を開催し、掲載記事について話し合いをします。編集委員と投稿記事に関しては、随時募集中です。

月例会と同様、日中文化協会設立以来続けられている事業です。中国の民族や文化の紹介を柱としていた内容から、会員相互の親睦を深めるために、会員の紹介や投稿記事を掲載する内容へと変化してきました。

一九四号からは、中国の庶民的な文化の紹介にも力を入れています。

歩こう会

一年に二回、春と秋に開催されます。春には桜、秋には紅葉を観ながら、留学生たちと一緒に、のんびり散歩しながら親睦を深めましょう！

昼食にはお弁当を持参し、青空の下、皆でわいわいやりながら食べます。お酒の持参もできますが、飲み過ぎには注意してくださいね。

東山動植物園や鶴舞公園といった定番のハイキングコースから、フルーツパークやビール工場といった普段はあまり行かないところへも行きます。時には思い切って遠出し、郡上の街を散策することもあります。

展覧会

中国から書法家を招いての「中国当代名家書法作品展」と、中国のコンクールで優秀な成績を修めた少年少女たちを招いての「中国青少年書法美術作品展」を行っています。

展覧会だけでなく、親睦会も開催して彼らの来日を歓迎します。少年少女たちは会員の方々の協力の下、日本の家庭で一日を過ごすホームステイを行います。

日中文化協会と十五年以上の付き合いがある張傑さんが主催し、文化交流と相互理解の促進を実現する、素晴らしい事業です。

日本語広場

上山学院日本語学校の学生たちを相手に、地図やイラストを見ながら日本語で色々な会話に挑戦します。

主に、来日して間もない初級レベルの学生たちが参加するため、会話はたどたどしいのですが、彼らの国の現在の状況を知る良い機会にもなりますよ！

覚えたばかりの日本語に自信がなく、なかなか話す勇気が出せない学生たちにとっては、日本語を話し始める良いきっかけとなっています。日本語広場に参加し、学生たちの背中を押してやってください。

名古屋中国春節祭

二〇〇七年二月、日中国交正常化三十五周年をきっかけに始まった名古屋中国春節祭ですが、今年で第十一回となりました。イベント舞台では、中国の一級芸術団が匠の技を披露し、会場内を獅子舞が練り歩きます。毎回十万人以上の人々が来場し、日中を挙げて旧正月を祝います。

日中文化協会も毎年応援しており、第二回からはブースを出して参加しています。

今年からは会場スペースが拡張され、今後の更なる発展が期待されます。とても楽しみですね！

〝一帯一路〟海外華人への影響

任健（常務理事）

〝一帯一路〟は国家戦略として六十五国家（中国、日本を含む）に係る、四五〇〇万人の華僑華人と関連している。新たな区域一体化構想として実施に伴うインパクトは中央アジア、東南アジア全域に及び、中国の開放改革の新たな手段として、海外に在住している華僑華人に大きなチャンスを与え、アジアおよび全世界発展の原動力になると予想される。

〝一帯一路〟の沿線国家に住む華僑華人は経済力や人脈、製造販売などによって、各地の法律と政策に精通し、中国本来の文化を十分理解し、諸条件を合わせて、国際物流（交通運輸）インフラの拡充、貿易・投資の拡大を軸とした新しい経済圏の形成に対し、大きく貢献ができると思われる。〝一帯一路〟は「新シルクロード構想」として具体的な実施過程中であり、華僑華人特殊な影響力を如何に発揮出来るかどうかがこれからの話題となっている。

長い間、大勢の華僑華人が国の発展と民族の振興の為、自身のニーズと人脈を利用し、積極的に中国の発展と建設に参加し、国際交流を行って、政府と民間交流のかけ橋として存在を示してきた。祖国の発展、繁栄、完全統一の為、世界中の華僑華人を団結して、現地国民との友好関係を促進し、民間人特有のルートを利用し、全力で活動し、各国の国民との信頼関係を結び、多大な評価を得るに至った。

シルクロード経済ベルトと二十一世紀の海のシルクロードの共同建設推進ビジョンと行動は、沿線国家の国民に福をもたらす。〝一帯一路〟は世界の発展の趨勢に合致すると考えられ、合作共栄、広範な地域で地域協力を促進し、共同発展を図る。

海外華僑華人は〝一帯一路〟の重要な参加者として、沿線国家との関係を改善、促進、発展させる重要な役割を果たすべきである。

したがって、〝一帯一路〟という重要なプラットフォームをいかに利用して、世界中各国の協力と交流を実現し、各国との関係を改善するかが我々にとって重要な課題である。

熱都の会員の独り言（寒中に）

新井正三

心頭滅却すれば火もまた涼し。

この句は皆さんも良く御存知かと思いますが、昨年も又日本一の最高気温を記録した岐阜県の多治見市ではここ数年、気温が三十八度を越すと熱中症に注意する様に広報が知らされます。

冒頭の句は戦国の世で、甲斐の武田氏を攻めた信長が、恵林寺に向った折、恵林寺の快川国師が山内の一衆と共に山門に籠り恭順の意を表す事が無かったので、信長が山門に火を放った時に快川国師が迫りくる炎の中で唱えられた文言で、恰も国師が作者の様に思われて居りますが、実は快川国師は禅門の僧侶で、修行の折、学校で例えるなら教科書に相当する、講本と称する種々のものが有りますが、その中の「碧巌録」と云う、中国の宋の時代の圜悟克勤禅師編・雪竇重顕が伝灯録と云う講本を中心に百則の公案（問題）を選び特に禅宗の中でも臨済宗で尊重されて居る中の四十三則に書かれた〝安禅は必ずしも山水を須いず、心頭を滅却すれば火も自から涼し〟に由来し、座禅をするには静かな山中や河畔と云う様に環境を選ぶ訳ではない、無心になれば如何なる処であっても安心決定する事が出来ると云った意の句であり、快川国師が炎の中で唱えた句の半分だけが世間に広がって残った訳です。

上山卓司初代理事長の思い出

山本哲夫（S41年卒）

私は、上山君と名古屋大学経済学部の同期生で、金融論のゼミでご一緒し、よく学び、よく遊んだ仲間であります。上山君が亡くなられた後、キタン新聞（名古屋大学経済学部OB会の新聞）に投稿した追悼文をそのまま掲載し、上山君のご冥福をお祈りすると共に、思い出とすることをお許しいただきたいと思います。
以下投稿した原文のままです。

上山卓司君追悼　（S41年卒）

六月二九日上山君は終に逝ってしまった。脳梗塞で倒れ、一年半有余に及ぶ闘病生活、奥様はじめご家族の懸命な励ましにもかかわらず。

思えば二〇〇六年一二月、日中文化協会の忘年会の日、彼と小生は、ひと月ほど前に開催した名大経済学部一四期同期会の写真配布のことで打ち合わせをしていた。同期会幹事である彼は、「俺が全部やるから任せておけ、それよりそろそろ中国領事も来るだろうから先に会場へ行ってくれ」私の聞いた最後の言葉となった。まさかその十分後に倒れるとは。

その後一年以上経ち、面会も出来るようになったとの事で、この五月下旬に彼を病院に訪ねた。「オーイ俺だ、てつだ」と呼びかけたら、じっと見つめて分かってくれたようだった。「今度みんなと来るから」と別れをつげた。実はこの七月一日に同期の連中と見舞いに行く予定であったが誠に残念な結果となってしまった。

彼は、永年に渡り教育関係に携わり、国内に止まらず、中国の奨学にも活躍し、日中文化協会を主催して、日中友好におおいに貢献をされた。二年ほど前にも中国領事館の居場所が定まらず、困っていた時に自分の中統ビルを中国領事館に提供したりして中国にとっては、大恩人となっていた。その一方で私達のキタン会でも実行委員会などで企画や司会やら随分活躍され、同期会でも中心人物でありその人柄からも、みんなに頼られ、親しまれ、また実際に随分と世話になったものである。まだこれから、日本でも、中国でもおおいに活躍が期待されていたのに、全く残念である。今後、少しでも彼の役に立つように、私はずっと日中文化協会の会員を続け、新しい会員を紹介するなどしたいと思っています。皆様もよろしくお願いします。

上山君、やすらかに眠りたまえ。

日中文化協会と私

服部牧子

ニューズレター二〇〇号おめでとうございます。

二〇〇〇年四月の日中文化協会設立からもう十七年が経つのですね。私は日中文化協会主催の中国名窯めぐりの旅に第一回より参加し、数えきれないほどの豊かな経験をさせていただきました。

初めて行った磁州窯の広漠たる原野、その雄大な景色や、現地の羊飼いとの交流、耀州窯研究所のとびきり美味しかった中国料理、壮大な歴史を感じさせる圧倒的スケールの兵馬俑。忘れられない特別な思い出です。その後も毎年のように名窯めぐりに参加し、中国陶磁の奥深さに触れつつ、中国の急速な発展を肌で感じることができました。

二〇〇三年には中国山東省シ博の中日韓国際陶磁博覧会に招待され、二〇〇九年には、CHUTOギャラリー「書と陶の三人展」でお世話になりました。日中文化協会との出会いによって、私は様々な経験をさせていただきました。上山綾子さんをはじめ、協会の皆様には本当に感謝しております。

二〇一四年一一月、東京の京橋にある画廊でグループ展に参加していた折、「むーずー、お久しぶり！」と満面の笑みを浮かべて、綾子さんがひょっこり現れました。当時は月例会にも参加しておらず、実に好久不見了！の出会いだったので、嬉しくてお互いに抱き合いました。その僅か一か月後に綾子さんの訃報を受けたことは、ただただ信じられずショックでした。

協会の中心的存在だった綾子さんはまだ若く、やり残したことも多々あったでしょうし、さぞ悔しかったことと思います。それでも、綾子さんの遺志を継いだご子息の努力と協会の方たちのサポートによって協会も発展し、ニューズレターもついに二〇〇号に達しました。亡くなった卓司さん、綾子さんもきっとお喜びになるでしょう。

日中文化協会の今後益々の発展をお祈り申し上げます。

日中文化協会郡上市支部発足と現況（前理事長故上山綾子さんを偲んで）

河合恒（郡上支部副支部長）

日中文化協会郡上市支部として発足し八年を迎えました。そもそも郡上市支部として発足した経緯を資料、記憶等により辿ってみます。

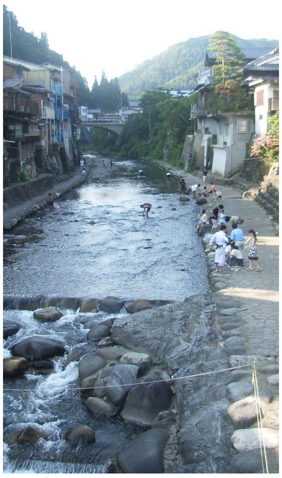
当時の郵政省つまり郵便局に簡易保険業務があり、全国的に利用されており簡易保険団体として各地で組成されました。郡上市内郵便局に団体が組成され、団体割引掛け金による旅行が国内外で実施されてきました。しかし、国の干渉により簡易保険団体による旅行は禁止となり、以降有志による旅行団体である郡上市旅行親睦会が組織され、名鉄観光バス（株）と提携し国内外の旅行を計画実行してきました。

平成一八年に中国武陵源（張家界）への旅行に、名古屋日中文化協会様の旅行の一団として郡上から十人ほど同行させていただきました。張家界市の琵琶渓賓館での歓迎会では、双方が歌をうたい、大いに盛り上がりました。中国側からも温かい歓待を受け、有意義な一夜となりました。その様子が北京市へと伝わり、後の中国北京第十届国際旅遊文化節「郡上舞」北京へと進んでいきました。この旅遊館には名古屋、郡上から約一五〇人参加しました。

こうした事が縁で、当時理事長であった上山綾子様の提案で「日中文化協会郡上市支部」を平成二〇年五月二〇日に、正式に発足いたしました。式典の記念講演として、唐啓山先生による「大いなる黄河文明について」の一時間三〇分にわたる講演は、大好評を得ました。

こうして郡上支部として徐々に活動してきました。活動内容としては年度当初年間計画をたて、基本毎月第三火曜日例会、中国語会話講習、講師として市内在住の中国からの帰郷者で、現在市内中学校で在日学生の指導者の辻里美先生の指導を受けています。

また時として中国での生活、習慣、文化等の講義を取り入れて日中友好に努めました。屋外研修として各分野に精通した、たとえば日本野鳥の会の会員による野鳥の観察会、市内、県内の知られざる名所、旧所等の探訪等、中国の勉強ばかりに限らず広く浅く楽しく永く活動を続けていけるよう工夫もしております。毎年九月には名古屋本部の九月例会にも参加し、本部との交流に努めてまいりました。



名古屋本部からの郡上への訪問も計画され、研修生による弁論大会を郡上八幡にて開催されたり、夏には日本三大民謡「郡上踊り」に参加されたり、秋には郡上の紅葉風景を堪能されたり、本部と郡上支部との交流が深まっております。

これも前理事長の上山綾子様の強い郡上への想いと、自然豊かな土地への憧れだったのでしょうか。突然の訃報に支部として深い悲しみに包まれました。私たちは彼女の意思と中国に対する想い、特に上山学院日本語学校に通う学生に対する想いを引継ぎ、日中関係の厳しい時代ではありますが、草の根活動、民間活動として、支部の活動に生かしていきたいと思います。

最後に改めて上山綾子様のご冥福をお祈りします。

日中文化協会ニュース二〇〇号発行おめでとうございます。

いけばな小原流　加藤信恵

上山綾子さんとは前知事の神田さんを通じて良いお友達となり、又ご主人の卓司さんは、私の従兄が名古屋大学の時の無二の親友だった事がわかり大接近となりました。旅行も北京や上海や南寧など楽しい旅をさせて頂きました。そんな中、東北の地震を思い出す時、あの日は中国広州の南にある広西農業技術学院で、生徒の皆さん、先生方、ご来客、新聞社、テレビ局など多くの方を前に、いけばなのデモンストレーションをしていた事と思い出します。

中統ビルに勤めていた李麗さんのご主人の任健さんのご紹介で大学の日本語学科、園芸学科の生徒さん達約二〇〇名に日本伝統文化のいけばなを教えると言う事でした。三月で気候、気温がわからず任健さんに訊きました。寒いですか？と。任健さんは笑って〃暑いよ〃と言うのです。それを信じ春の装いで出掛け、空港に着くと任健さんは、なんとセーターに上着を着て迎えに来ている。ビックリ。大学に案内され学内の宿泊所に泊めて頂く事に。次の日、朝一限目は八時半に始まるとの事に又々ビックリ。国がちがうとあらゆる事が異なり、驚きばかりです。

生徒達は日本人に会う事がなかった様で、日本の事は何でも教えてもらえると思い込み、剣道やアニメにまで話が広がります。私はいけばなと茶道は教授者資格が有るから教えますが、アニメや剣道等は教えられない事を大学教師の通訳でお伝えしました。

日本国内でも、若者のマナーについて色々言われていますが、中国の大学の初日授業後、驚く事が起きました。教室の外のゴミ箱に、先ほど使った花材が、多量に捨てられていたのです。私は悲しくなり、次の授業で訴えました。花にも命が有る事と、小さな苗から水をやり肥料をやり、消毒してやっと切花として出荷された花です。花をいける器や剣山がなくとも、コップにでも入れて下されば花は水をもらえます。そんな花への気持ちと教える教師への心くばりも大切ではないですかと。

あれから五年、学生達は私の訴えを覚えているでしょうか。これからも花だけでなく、何事にも優しく接していきたいと思っています。そんな優しさは、今思うと綾子さんの笑顔を思い出します。

私と中国

藤吉行雄

私は平成一二年からの日中文化協会の会員ですが、日頃会への貢献は少なく、新年会・忘年会への参加だけという幽霊会員でお恥ずかしい限りです。ここで、私の中国とのかかわりをご紹介しておきましょう。

私が中国と接したのは小学生のころ、三国志や水滸伝などを読んで、中国は大きな国だなあ、と思っていました。中学に入ると、その頃の中学には珍しく漢文の授業があり、その漢文を通して中国の文物に興味を持ちました。そこで大学は大阪外国語大学を選びました（昭和四三年）が、当時まだ日中国交回復前で、中国は文化大革命のさなか、中国国内で何が起こっているのかさっぱりわからず、それが毛沢東の奪権闘争であったことを知ったのはのちになってからです。当時は町でも中国人の姿を見かけることはまれで、現在の状況を見ると今昔の感があります。

そののち不思議な縁で医学を学びましたが、中国との縁は途切れず、今まで何人かの中国人留学生をお世話しました。どの中国人もまじめで、熱心に勉強して国に帰って中国の医学に貢献している人もたくさんおります。私は一昨年三月に退職しましたが、現在も研究室に毎日出勤し、留学生と机を並べて研究を続けています。私の中国との縁は死ぬまで続くでしょう。

現在日中関係は国交回復以後最悪とも言われています。微力ながら、医学を通して日中友好に貢献できれば幸いです。添付は昨年大連を訪ねて昔の留学生と交歓したときの写真です。彼女は現在大連医科大学の副教授になり、将来を嘱望されている研究者です。

習い覚えた小さな技で

上山みさ子

日中文化協会が発足して早いもので、十七年になる。ニューズレターも二〇〇号記念。おめでとうございます。

　二〇〇〇年の発足のパーティの時に、大叔母の命令で、美しい李麗と二人で組んで、二か国語の司会を仰せつかった。以来、昔に習い覚えた司会という小さな技のお蔭で、様々な日中の友好行事のお手伝いをさせていただいてきた。中でも、印象深いのは、二〇〇九年に任健さんの故郷の南寧での日本文化祭だ。上山綾子姉と同じ部屋に一緒に投宿したのも、今となっては愛しい思い出だ。

　舞台が組まれ、生け花や着付けやお人形や竹細工やら日本の文化を中国の方に紹介するというパフォーマンスを見せた。南寧の方々も、日本文化に親しみを持ってくださり、とても喜んでいただいた。

　ところが、舞台と言いながら、照明が当たっていない。照明・音響・舞台装置と、ステージパフォーマンスに照明は欠くことのできないもの。照明がなければ、舞台はただの巨大なかまぼこ板だ。「ええ？照明なし？」と焦る私に、あわてて任さんが急遽会場の人と折衝してくれて、ようやく灯りをもらうことができた。綾子姉は、そんな時にも「おやおや困ったわねえ」と緩やかに笑っていた。この綾子姉のいつでもおおらかな感じ、皆さんも懐かしく思いだしていただけると思う。あわてず騒がずの泰然自若。真似のできない愛らしい大人物ぶりだ。

　また、万博や、総領事館のレセプションをはじめとして、様々な中国関係のステージの司会もさせていただいてきた。ライブというのは、往々にして、本番直前の土壇場ではいろんな変更がある。もう、すっかり慣れたので、変更はあって当たり前と思っているが、中国の舞台は格別に「急遽」が多い。照明がないのは例外的だが、演目なども、そのままであることの方が珍しい。アドリブに強いというか？臨機応変というか？特に、中国語だけしか話さない人とのペアでの司会は結構大変だ。（向こうも中国語のわからないおばさんと組むのは大変だと思っていると思う。スミマセン）

　会員の皆様はよく御存じと思うが、自慢ではないが私の中国語は、三言くらいしか話せない。その三言が妙によい発音だったり、チャイナ服を着ていたりするので、日本語の流暢な中国人と誤解する人もいた。（さすがにもういないと思うけど）

間に通訳が入ればありがたいが、春節祭の前夜祭の四海同春の司会は、毎年胃が痛む。「日本語のセリフは、なるべく少なくていいんです」とはいうものの、緊張する。

　特に去年ははじめてのことで、忘れがたい冷や汗ステージになった。現場に行くと、用意周到な中国側のプロの司会者が来ていて、台本をもらっていないのか？と私に詰め寄る。本番までに、時間はない。なんとか、日本語の部分だけ理解したけど、中国語のセリフの部分がわからないので、相手の話し終わりのタイミングがわからない。終わったら、私の顔を見てねという実にアナログな合図をお願いしたが、内心ドキドキはらはらのし通しだった。

　何年か前には、北京で中国のハンサムなアナウンサーと組んだこともある。前の李天然総領事（現駐福岡総領事）が唐山市の副市長になられて、唐山市高新技術開発区への日本企業誘致のために、北京での日本企業向けの忘年会の司会を依頼された。あんなに、いつもはハプニングと変更の連続なのに、この時はちょっとした変更も上層部の許可をとる必要があるのだと、相方のハンサムなアナウンサーはとても慎重だった。政府が絡むフォーマルな会とそうでない時の責任の重さは、千倍以上とその時理解した。

　駐名古屋の中華人民共和国総領事館の春節と国慶節のレセプションの司会もさせていただいているが、日中関係が緊張感のある状態の時もあり、開催が危ぶまれた年もあった。そんな年には、ＳＰの数が増え、会場も緊張した空気になる。尖閣問題で揺れたその年は、式次第の読み上げのみ。他にはなにもしゃべらないでくださいと言われた。以来、正式なレセプションの場合は、つつがなく事故なく終えることが最大の目標と心得、極力余計なコメントはさしはさまず、友好の気持ちを込めるのみ、を信条としている。

　あまり気が進まないこともあるが、はらはらさせられた時には、必ず本番よりも、その後の打ち上げが楽しい。中国の仲間の底抜けのパワーを感じて、こちらまで元気になってまた次回ということになる。日中文化協会の集まりの司会はいつも楽しい。政治や政府に関係なくいつも暖かい友情に満ちている。こんなに親しみ深い国際交流の民間団体は、誇りを持って継続させていかなくては、と思っている。

　普段何もできていなくて申し訳ないけど、昔習い覚えた小さな技で、日本と中国の交流のお手伝いをさせていただけるのは、本当にありがたい。中国とのご縁を作ってくれた大叔父や大叔母、卓司さんや綾子さんに感謝している。

　日本と中国の友好の会で司会をさせていただいたりすることが、私の民間交流の役目と心得、受けたご恩や得難いつながりを、下の世代にも伝えていきたいと思う。

おわりに

ニュースレター一五〇号の発行から四年余。今回は二〇〇号発行を記念して特別版を製作致しました。皆さまのご協力を支えに、これまで続けることができております。この場を借りてお礼申し上げます。

今回の編集に際して、これまでのニューズレターをさかのぼり、父と母のことを思い出しながら、懐かしさを感じております。父に言われて、参加者が少なくなってしまった囲碁同好会に初心者として参加したところ、いつの間にか囲碁が趣味になってしまったこと。父が倒れたとき、母は活動の継続を断念するどころか、何が起きても自律的に活動を継続できるよう、社団法人として、日中文化協会に生命を吹き込む決断をしたこと。今でも、彼らの思いは生きているのだと実感しております。

近年の日中関係を顧みると、とても良好とは言えない状況が続きます。こんなときだからこそ、積極的に活動し、どんどん発信し続けなければ、と思っております。

皆さまの温かいご支援を、今後ともよろしくお願い致します。

編集委員長　上山　耕治

ありがとうございました

ありがとうございました

2017 年 2 月 10 日発行

発行所　一般社団法人　日中文化協会

〒460-0008　名古屋市中区栄 4-16-29

TEL　052-262-1410　FAX　052-262-5036

URL　http://www.chuto.co.jp/china/

編　集　日中文化協会　編集委員会

印　刷　株式会社カミヤマ